編集後記

本学は1872年に設立された京都療病院をその創始とする公立単科医科大学であり来年2022年には創立150周年を迎えることになる。その前年である本年2021年は1921年10月に本学が大学昇格を果たして以来、ちょうど100年目の記念の年に当たる。本冊子「京都府立医科大学 大学昇格100周年記念誌 ～比叡は明けたり～」はこの大学昇格100周年を記念し出版されたものである。

そもそも本学ではこれまで節目節目の年にしっかりとした沿革史を編纂し発行してきた伝統がある。例えば1908年（明治41年）には「京都府立医学専門学校沿革略史」とする医学校記録を出版し、1972年から1908年にかけての本学の記録を残している。同様に、1955年には「京都府立醫科大學八十年史」を、1974年には「京都府立医科大学百年史」を、1999年には「創立百二十五周年記念誌」を、そして2007年には「京都府立医科大学創立百三十五周年記念誌」をそれぞれ発行した。また、2012（平成24）年には「創立140周年大学紹介冊子」を刊行した。そして現在、「150周年記念誌（仮）」の編集作業が進められているところである。これらの沿革史はいずれも「網羅的であること」そして「記録に重きが置かれること」をその共通した編集方針としている。

こうした背景の中、当冊子は、「150周年記念誌（仮）」と出版時期が極めて近いこともあって、上記の「記録を主眼とした沿革史」とは一線を画すかたちで編集された。他の医科大学の昇格と状況が異なって、本学の大学昇格にはずいぶん大きな困難がともない、また当時の教職員・学生たちにはさまざまな覚悟・思いがあったことがわかってきた。そこで、各方面からのご祝辞・エールをいただくとともに、大学昇格の舞台裏や当事者の方々の思いなどに焦点を当てた複数の記事を収載する構成とした。また、大学昇格や先人の思いを受けて現在の学部学生たちがどのように感じるか、生の声を収録することにも心がけた。ご多忙のなか、素晴らしい原稿をお送りいただいた著者の皆様と座談会記事のためご参集いただいた方々に深甚の感謝を申し上げる。

私たちはただ安寧たる日々の延長上に立っているのではない。現代に生きる私たちが次の100年間に向けて歩を進めるにあたって、大学昇格時の原点に立ち返り、また、先人たちの大学昇格にかけた困難克服への努力と決意・思いを共有する上で、本冊子がその一助となることを願いたい。

当委員会は竹中 洋学長と夜久 均創立150周年記念事業委員会委員長によって指名された奥田 司学長特別補佐（委員長）、加藤則人副学長（副委員長）、橋本直哉副学長、吾妻知美看護学科長、八木田和弘研究部長、樽野陽幸教授、そして事務方から荒田 均参与、井上詩織主事、土屋ちひろ主事、くわえて井端泰彦学友会長と上田尚司学友会京都支部長のご推挙で東道伸二郎学友会理事に加わっていただき、大学昇格100周年記念事業準備・実行委員会を構成し、当冊子の編集作業はもとより、大学昇格100周年式典全般に鋭意取り組んだ。

大学昇格100周年記念事業準備・実行委員会（本部棟前にて）
後列左から、荒田、八木田、加藤、橋本、樽野、土屋
前列左から、吾妻、夜久、奥田、東道、井上

大学本部棟全景（旧 附属図書館棟、1929［昭和4］年竣工）

編集作業や資料収集や式典関係全般には、委員会メンバー以外にもたいへん多くの方々にご尽力いただいた。八木聖弥准教授、松尾和俊学友会事務長、高田知左学友会事務、嶋崎健一郎総務課総務係長、嶋田由紀子総務課主査、西山正俊図書館事務長、清水直喜教育支援課長、岩子真也同・大学院係長、金田博彦同・学生支援係長、そして松本晃典附属病院初期臨床研修医には特に名を挙げて深謝するが、その他にも多数の皆さんにご協力をいただいたことを感謝したい。

なお、編集方針として、記事類はこれまでの本学歴史書に倣って敬称や敬語を介さず記載した。失礼あればお許しいただきたい。一方、挨拶文や対談では人柄を反映した言葉使いを残すようにした。しかしながら、なにしろ素人の判断での編集作業であったゆえ、いろいろと不備や不整合のあることと懸念している。不備・誤謬については委員長の責であり、平にご容赦をお願い申しあげたい。

文責・奥田　司、加藤則人